福井県教育委員会「中高英語教員指導力向上研修」をリポート

英語４技能を統合して育成し、大学入試改革に対応する指導・評価について研修を実施

福井県教育委員会は、2015年８月、県内の全ての公立中学校・高校の英語教員を対象に、「中高英語教員指導力向上研修」を実施した。
講師はベネッセのＧＴＥＣ開発担当者が務め、技能統合型の言語活動のあり方や、英語運用力を育成する観点からの定期考査・パフォーマンステストの見直し方について、参加者はさまざまな活動をしながら学んだ。ここでは、高校教員を対象とした研修会の模様をリポートする。

GTECの評価ノウハウを校内のテストに応用

福井県では、英語の４技能運用能力の育成と共に、新たな大学入試への対応を視野に入れ、英語教育の改革に取り組んでいる。現在、公立高校の入試において、スピーキングの導入も検討中だ。

改革の中で特に注力しているのが、評価方法の見直しだ。2012年度には、全ての公立高校がCAN-DOリストを作成している（公立中学校に対しては2013年度に実施）。ただ、その活用については課題があり、特に表現活動を評価するノウハウを求める声も多い。

そこで着目したのが、県内で導入が進んでいるベネッセのGTEC for STUDENTSだ。スピーキングとライティングについて、GTECの採点方法や採点基準などを学ぶことで、それらを定期考査やパフォーマンステストなどに応用できないかと考えたのだ。

教育委員会では、ベネッセから講師を招き、2015年８月の２日間、

福井県教育委員会「中高英語教員指導力向上研修」プログラム

第１部
「指導と評価の一体化」ワーク― CAN-DO リストと定期考査の比較検証
福井県教育庁学校教育政策課言語・総合教育グループ　主任　浅井裕規（ひろき）

第２部
「英語教育環境の変化」
ベネッセコーポレーション高校事業部 GTEC 事業推進課　課長　込山（こみやま）智之

第３部
「日々の指導・評価に生かせる、作問・クライテリア・マーキング」
― GTEC for STUDENTS のスピーキングテストを通して
GTEC 統括編集長　渡辺都（とし）子、GTEC コンテンツディレクター　森野勉
（研修コンテンツ作成協力／玉川大文学部英語教育学科　工藤洋路准教授）

＊研修資料を基に編集部で作成

「評価が変われば、指導が変わる」を目指して

福井県教育庁
学校教育政策課参事
橋本久代
はしもと・ひさよ

全国的な課題ではありますが、英語を話す力や書く力を始めとした生徒の英語運用力を高めていくことは、本県においても最重要課題の１つです。そこで、「評価が変われば、指導が変わる」という考えに基づいて評価方法の見直しを進めており、その一環として今回の研修を企画しました。この機会に、教員が GTEC の評価のノウハウを参考にし、それを定期考査やパフォーマンステストに生かすことで、英語の４技能を統合して子どもたちの英語力を伸ばすと共に、今後の大学入試改革への対策にもつなげたいと考えています。

ベネッセは、GTEC を始めとする全国規模の調査・検定を通して膨大なデータを蓄積しており、指導・評価に関するノウハウを豊富にもっています。その知見をお借りし、本県の実態に即した指導改善を進めていきたいと考えています。今回の研修の成果は、今後、教科会などを通して共有し、各校の指導改善の推進に役立ててもらうだけでなく、更なるサポートも検討していきます。教育は、目の前の生徒に対する教員の思いがあってこそ花開くものです。先生方には、生徒が学ぶ姿を見つめながら、日々の指導を通してチャレンジを続けていってもらいたいと思います。

県内全ての公立中学校・高校の英語教員を対象に4技能の指導や評価の改善を図る研修を実施。1日目は中学校教員71人、高校教員2人、2日目は中学校教員5人、高校教員28人が参加し（**写真1**）、同じ内容で研修が行われた。その主な内容を紹介する。

写真1　研修は、講演を聴くだけでなく、その内容を実感できるよう、関連する英語の問題に取り組むなど、活動を取り入れながら進められた。

第1部　「指導と評価の一体化」ワーク

パフォーマンステストや観察なども実施

まず、自校ではどの程度、指導と評価の一体化がなされているのかを、参加者が確認するためのグループワークが行われた。コーディネーターを務めたのは、福井県教育庁学校教育政策課の浅井裕規（ひろき）主任だ。

参加者はペアを組み、持参した自校の定期考査の問題とCAN-DOリストの内容とを比較し、内容が関連する箇所を説明し合った。続いて、5～6人のグループとなり、自校の英語指導について良い点や課題を説明し合い、指導ノウハウを共有（**写真2**）。その内容をまとめ、各グループの代表者が全体発表を行った（**図1**）。

福井県では、既に全ての公立中学校・高校がCAN-DOリストを作成した。今後の課題は、そのリストを活用すると共に、生徒や保護者にも公表することだ。「CAN-DOリストは教員だけのものではありません。生徒や保護者も、到達目標を把握することにより、変わりつつある英語指導の意義を理解できます。また、CAN-DOリストに基づいてコミュニカティブな授業を実施しても、評価とリンクしていないと教育効果が十分に表れません。スピーキングはペーパーテストで評価は出来ないので、パフォーマンステストや日々の授業における観察などによる評価も併せて行うのが望ましいでしょう」と浅井主任は強調した。

福井県教育庁
学校教育政策課
言語・総合教育グループ主任
浅井裕規
あさい・ひろき

写真2　グループワークでは、持参した資料を示しながら、自校の英語指導で工夫している点などを説明。全校から教員が参加している利点を生かし、お互いのノウハウを共有し合った。

図1　CAN-DOリストと定期考査の関連についての発表内容

●定期考査の問題とCAN-DOリストが関連している点

- 教科書の内容に関連する初見の文章での正誤問題などを出題した。
- 教科書の中の課題文のテーマに関する自分の意見を英語で話す練習を授業でさせた上で、それを英語で書く問題を出題した。
- CAN-DOリストの「あいさつが出来る」の項目に沿い、あいさつのやりとりを会話形式の問題として出題した。
- 教科書の中の課題文で印象に残った内容を選び、その理由を含めた英作文を書く問題を出題した。
- 初見の英文を読み、ペアで内容について話し合い、その後、自分の意見を述べるというテストを実施した。
- 定期考査では、まとまった量を書かせる時間が取りにくい。そこで、授業中に英作文のテストをしたり、ALTによるパフォーマンステストを実施したりしている。
- 生徒用CAN-DOリストを技能ごとに作成。生徒は4段階で自己評価をして到達度を確認する。

●今後の課題

- CAN-DOリストの内容を、教員が全て把握できているわけではないため、定期考査ではCAN-DOリストと関連していない問題も出題している。
- CAN-DOリストを活用して、評価方法に占める定期考査の割合を減らし、Speaking、Writingのパフォーマンステストや小テストの割合を増やす。

＊取材を基に編集部で作成

技能統合を意識した言語活動が必要

第２部の講演で、今後の大学入試において英語の４技能が重視されていくという環境変化の解説がなされた後、第３部では、４技能を評価するために日頃のテストではどのような出題をすればよいのかについて、講演とグループワークが行われた。

まず、GTEC統括編集長の渡辺都子（とし）がライティングの評価について説明。一例として、2014年度、文部科学省「英語教育改善のための英語力調査事業」（＊１）で出題された情報要約問題を紹介した。これは、１分程度の英語の音声を聞き、約30語で要約するという問題だ。参加者はその問題に取り組んだ後、「問題を解くために必要なスキル」「そのスキルを育成するための言語活動」について、ペアを組んで意見交換をした。

参加者からは、「リスニング力はもちろん、英語の文章の構成を読み取る力やメモを取るスキル、また、メモから文章を書き起こす力などが必要だ」という声が上がった。それに対し、渡辺は、「本問題は、英語の音声を聞いて、英語で要約する、つまり『聞く→書く』という技能統合型の問題であり、定期考査のように、授業での学習内容の理解度や定着度を測る問題ではありません。このような技能統合を意識した言語活動を通して、必要なスキルが養われていきます」と説明した。

「英語教育改善のための英語力調査事業」では、技能別のレベルを示す国際標準規格として欧米では一般的なCEFR（＊２）によって評価していることについても解説した。

「CEFRは、action-oriented、つまり、『英語を使って実際に何が出来るのか』という観点で英語力のレベル分けをしています。英語を使う環境において、授業で学んだ事柄を使うと何が出来るのかを考える良い機会となるはずです」と、渡辺は話す。

また、文法指導に関しては問題を提起。個別の知識にとどまらず、「書く・話す」を見据えた文法指導の重要性を強調した。文法指導に関する課題の一例として、同じ知識を問うているものの、形式を変えると正答率が大きく異なる２つの問題を提示（**図２**）。「生徒が頭の中の引き出しから必要な文法を引き出せないことが、正答率の差に表れています。場面に応じて必要な文法を引き出せる運用力を伸ばす指導が、文法指導では大切です」と指摘した。

更に、Reading Passageから「書く」言語活動をどうつくるのかについても、具体的な問題を提示しながら説明が行われた（**図３**）。

ベネッセコーポレーション GTEC 統括編集長
渡辺都子
わたなべ・とし

スピーキング力が伸びる活動とは何かを実際に体験

スピーキングの評価については、まず、参加者全員がGTEC for ST

図２　出題形式の違いによる正答率の違い

〔歌舞伎公演のポスターを見て〕
Koji : Do you know about kabuki?
Mike : Yes, but I have seen it.
（否定文にしなさい。）
Koji : Really! Then you should see it. Let's go together.

正答率 65.3％

〔歌舞伎公演のポスターを見て〕
Koji : Do you know about kabuki?
Mike : Yes, but _____ it.
(see)
Koji: Really! Then you should see it. Let's go together.

正答率 24.5％

＊研修資料を基に編集部で作成

図３　Reading Passage から「書く」言語活動への移行

①英文を読み、理解・確認をする
初めに概要を捉えさせる。

②生徒とのインタラクション
英文の内容を考慮しながら、教員と生徒が英語でやりとりをし、自分の問題に置き換えて考えさせるなどして、英文と生徒を結び付ける。ここは書く活動の前提となる話す活動の段階であり、問題提起であるため、うまく答えられなくてもよい。

③ Writing 活動の設定
「書き手の立場」「書く目的」「読み手」などを設定し、より authentic なタスクを提供することが大切。

＊研修資料を基に編集部で作成

＊１　高校３年生約７万人を対象に行った英語力調査。詳しくは右記サイトを参照。http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm
＊２　Common European Framework of Reference for Languages の略。

UDENTSのスピーキングテストを、実際の形式と同じようにタブレット端末を使って解いた（**写真３**）。

次に、GTECコンテンツディレクターの森野勉が講師となり、授業で出来る言語活動として、教員役が生徒役に質問して話を引き出しながら２分間会話を続けるペアワークを行った。その際に、「What's the date today?」「How's the weather?」などのDisplay Question（質問者が答えを知っている質問、学習者の理解を試すための質問）から徐々に踏み込み、Referential Question（質問者が答えを知らない質問、コミュニケーション目的の質問）を増やしていくことで、会話が活性化し、生徒が英語を使う練習になると説明した。

ベネッセコーポレーション GTEC コンテンツディレクター
森野 勉
もりの・つとむ

ワーク後、数組が発表し、「質問は生徒が答えやすいものにする」「生徒が答えた事柄に関連する質問をする」「教員より生徒が多く話すようにする」「教員が支援し、生徒が発言できなかったことを言えるようにする」といった活動のポイントを共有した。

次に、論理的に話す力を伸ばす活動として、メモを活用したスピーチの手法が紹介された。参加者は「The recent news that impressed me」というタイトルのスピーチを２分間で準備し、代表者２人が各１分間で発表した。「メモはキーワードのみとし、英文を書かないのがポイントです。即興的に文法を組み立てて話す練習になります」と、森野は話す。

スピーキングの評価方法も詳しく解説。森野は、「複数の教員が異なる観点で評価する場合を除き、教員１人で内容や発音、正確さなどのあらゆる観点を同時にチェックするのは難しいと思います。そのため、『会話を１分間続けられるか』『指示通りの内容が含まれているか』など、具体的な観点を決めておくのが望ましいでしょう」と事前に評価のポイントを絞り込む重要性を強調した。生徒には、「学習した表現を入れる」「意見の理由を述べる」など、評価の基準にかかわる指示をしておくとよいと、森野は話す。

写真３　GTEC for STUDENTS で実際に行われているスピーキングテストを教員が体験。

また、生徒が「やらされ感」を抱かないように、「誰に対して、何を伝えるために話すのか」という設定を明確にし、生徒の目的意識を高める重要性も指摘した。

質疑応答

生徒の実態に合わせて無理のない実践を

最後の質疑応答では、参加者から多様な質問が寄せられた。

「生徒の実態を踏まえると、文部科学省の設定する目標は高すぎるのではないか」という質問に対して、高校事業部GTEC事業推進課課長の込山（こみやま）智之は、「確かに高度な英語力の育成を目指し、改革のペースがこれまでになく速いのは事実だと思います。ただ、文部科学省は、各校の生徒に合った内容やレベルの教材を用いた活動を行うことを基本方針としています。生徒の実態に合わせて無理なく、興味・関心を高めやすい内容や形式の言語活動を導入することが求められています」と述べ、あくまでも生徒目線での活動の重要性を語った。

英語の外部検定試験でのライティングの問題に関して、「採点では、表現の型が優先され、現実の場面で用いる英語とはやや食い違いがあるのではないか」という質問があった。それに対し、森野は「生徒のレベルによっては、ある程度、型を与えることは大事ですが、それが全てではありません。自然な流れの会話と判断されれば、型通りでなくても減点されることはないと、生徒たちに伝えてください」と、GTECでの採点基準を例に挙げ、現実場面に即した運用能力を伸ばす大切さに触れた。

「指導と評価の一体化」の考えに基づき、まず評価方法を変えることで、指導の内容や方法、そして生徒の意識の変革を図る福井県の取り組みの進展を、今後も注視していきたい。